

2015 年脳卒中学会抄録

急性再開通療法におけるプロセスに基づく予後の検討

木村浩晃、谷崎義生、美原盤

美原記念病院 神経内科

Department of Neurology, Mihara Memorial Hospital, Iseaki, Japan

美原記念病院 脳神経外科

Department of Neurosurgery, Mihara Memorial Hospital, Iseaki, Japan

【目的】 当院での脳主幹動脈閉塞症例に対して行われた急性再開通療法における来院後のプロセスに基づく予後の検討を行った。

【方法】 当院で 2010 年 10 月から 2014 年 7 月まで 41 例に急性再開通療法が行われ今回の研究対象とした。来院後の、ベースライン画像撮影、穿刺、再開通または最終血管撮影までの時間間隔を測定した。症例背景、使用デバイスや手技、3 か月後 mRS 0~2 の機能予後良好例の検討を行った。

【結果】 時間間隔の中央値はそれぞれ、来院からベースライン画像撮影：16 分、ベースライン画像撮影から穿刺：116 分、穿刺から再開通または最終血管撮影：117 分だった。当院でペナンプラシステムの ADAPT テクニックを用いるようになった 2013 年 10 月以前と以降の症例で比較すると、穿刺から再開通または最終血管撮影においてのみ有意な時間短縮を認めた(中央値 128 分対 78 分、 $p=0.003$ )。TICI 2B/3 の再開通はそれぞれ、16/30 例(53.3%) 対 6/11 例(54.5%) とほぼ同等だったが、3 か月後機能予後良好例は 7/30 例(23.3%) 対 5/11 例(45.5%) と後者で多かった。

【結論】 急性再開通療法における来院後のプロセスの改善によりさらなる機能予後の改善を目指せる可能性がある。